石川達三

作品集

16

石川達三
傷だらけの山河

新潮社版

傷だらけの山河
石川達三作品集第十六巻
昭和四十八年八月二十五日　発行
昭和五十一年六月　二十　日　四刷
定価九〇〇円
著者　石川達三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部（〇三）二六六一五一一一
編集部（〇三）二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番
印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
装画　下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1973 Tokyo
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目　次

傷だらけの山河　5
解　題　久保田正文　389

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

傷だらけの山河

傷だらけの山河

家は小さいが……

家は小さいが、敷地は百八十坪ばかりあって、庭木がよく茂っていた。通りから少し引っこんでいるので、意外に静かだった。古風な引戸のついた小さなひのき造りの門に松の枝がかぶさっていて、いかにも隠宅という風情である。門から玄関までの五、六間の石敷きの道は、両側につつじやどうだんや八ツ手の植込みが続いている。何もかもが純日本家屋の、常識的な配置だった。常識にはまった家の中には、常識にはまった人間が住んでいる。かたちが人を造り、人がかたちを造るのだ。民子は敷石の道に水を打っていた。毎日の夕方の、彼女の行事である。白い素足に塗りの下駄をはき、和服のたもとを絞ってたすきをかけている。たすきの色だけが年甲斐もなく赤かった。しかしその色もまた彼女の生活から来た常識であった。

開けはなした玄関の格子の奥の方で、電話のベルが鳴った。彼女はひしゃくをバケツの中に投げこみ、いそいで玄関をはいる。もう何日もまえから、電話が来るのを待っていたのだった。相手は聞かなくても解っていた。それほど、電話がかかって来ることの少ない暮しだった。

「もしもし……」

「ああ、わたしだ」

「はい……」

「変り無いか」

「はい。何もございません」

「うん。五時ころ、そっちへ行く」

「はい、お待ちしています」

短い会話だった。話が短いのは、相手が他人でない証拠だった。この二十何年というもの、民子の生活はひとくちにいうと、(待っている)ことだけだった。来る日も来る日も彼女はただひたすらに勝平を待っていた。それは愛情の深さとは別のことだった。待つこと以外には方法も手段もなかった。全く無抵抗に彼女は待っていた。男はいつも遠くに居る。遠くに居る者に対してはどうすることも出来ないのだ。民子は自分の方から出かけて行くことも出来ず、相手を呼出すことも出来ない立場だった。勝平はただ彼自身の意志で、気が向いたとき、暇ができたときに、勝手に訪ねてくる。その時だけが彼女の人生だった。自分を解放することの出来る時間だった。

彼女はそういう生活に耐え得る女だった。永い忍耐の連続が、彼女を表面は無抵抗な、静かな、むしろいじけた女にしてしまったようだった。そして少しばかり、古風でかたくなな女になっていたようだった。

座ぶとんは日に乾して、やわらかくふくらませてある。寝間着はきれいに洗ってある。枕カバーも真白だ。いつ彼が来ても手落ちは無いように、万端の用意はできている。民子は魚屋に電話をかけて刺身を註文し、風呂のガスに火をつける。台所へ行って酒の量をしらべてから、二階の火鉢に火をいれ、床の間の花の水をとりかえる。ガスに小鍋をかけて吸物の支度をする。それから顔を拭き髪をととのえ、うす化粧をして、着物を着かえる。ついでに下着までとりかえる。すべて、何もかも、男を待つ女の心づかいだった。その心づかいは形通りであり、常識的であり、二十年たっても少しも変らない仕来たりだった。民子が変らないということは、勝平が変らないということでもあった。そういう心づかいをし、支度をしているあいだに、女の感情は次第に熟して行く。いまさら新しい感動がある筈もないのに、やはり民子は気持がはずんでいた。

夕陽がすっかりかげったころになって、勝平は門をはいって来た。自動車はここまでははいれないので、表の通りで彼は車を乗りすてる。車はそのままどこかへ行ってしまって、七時半までは帰って来ないのだった。勝平は手ぶらで、帽子もコートも鞄も、何も無い。散歩から戻って来たような気易さで、色づいたどうだんの葉をながめながら、打水の敷石をふんで玄関のガラス格子をひらく。しんかんとした家の中から、廊下を踏む小走りの足音がきこえてくる。彼はだまって靴をぬぎ、式台にあがる。あいさつも何もない。

勝平は六十を過ぎているのに、体重は二十貫もあった。半白の髪がまだふさふさとしていて、からだじゅうのどこにも病気はない。そういう頑健さが、彼を気の強い、わがままな男にしていた。ぴかぴかに磨かれたひのきの階段をふんで二階にあがり、廻り廊下の角に立ちどまって彼はたそがれ時の外の風景をながめる。このあたり一帯は住宅地であったから、こんもりとした庭木と黒い屋根とがつらなっているばかりで、広告塔やネオンの赤さはどこにも見られなかった。

民子はみだれ籠から着がえのための男の袷をとり出し、かわりに洋服の上着をうけ取って衣紋竹にかける。そして、

「お風呂、できています」と言った。

勝平は立ったままでネクタイを解く。そして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「郁夫は居るのか」ときいた。
「いいおですって？」
民子は顔をあげる。そんな人間がこのうちに居る筈はない。何かまちがっているのだ。彼女は息がつまるような気がした。
「変なひとね。竹雄のことでしょう」
「ああ、竹雄だ。居るのか」
「まだ学校です。……あなたは子供の名前も覚えて下さらないのね。ずいぶん冷たいお父さんだわ」
怨む気持と同時に、あきらめの気持もあった。私がわるいのだと、子供に詫びたいような気持もあった。この父と子は、ひと月に一度も顔をあわせることはない。同じ血は通っていても、気ごころは通っていないのだった。はかない親子だ。勝平と民子との関係も、二十何年も続いておりながら、やはり何かしらはかなくて、どこにも根がないようだった。そういうはかなさを、彼女はどれほど耐えて来たかしれなかった。怨みごとを言ってみても始まらない。有馬勝平は二十幾つの会社の実権を一手ににぎっている大きな事業家だった。彼の個人資産だけでも、何十億あるかわからないような男である。
着がえをすませると彼は机の前にすわって、一本の葉巻に火をつける。民子は階下におりて、小瓶のビールとコップとを二階へ持ってあがる。勝平はこのうちへ来るとすぐに、一杯のビールを飲む習慣があった。その一杯が、昼間の劇務から彼を解放してくれる。公人から私人に返る。会長、社長、顧問という立場をはなれて、ひとりの男になる。平凡な、ただの男になる。そして気が向けば、民子をとなりの寝室にさそう。入浴はそれからであった。
勝平が風呂にはいっているあいだに、民子は台所にもどって、彼のために酒肴をととのえる。ひと月ぶりに女の感覚に火をつけられて、からだが火照っていた。皮膚が厚ぼったくなっていて、手足の動作がすこしばかりぎごちないような気がする。二階に食卓がととのった頃に、勝平はさっぱりした顔をして風呂から上がってくる。身ぎれいな、かっぷくの良い老人だった。民子は置時計を見る。五時五十分。七時半になれば、また車に乗って行ってしまう男だった。決してここに泊ることのない、たった二時間半ほどのめぐり会いである。そういうはかない関係のなかで、民子はせい一杯に貞淑に暮していた。貞淑だけが、彼女の義務だった。

格子をあけて、ひとあし玄関の土間にはいると、つい

と良い匂いがした。葉巻煙草のにおいだった。またおやじが来ているな、と竹雄は直感した。

しかし眼の前の沓ぬぎ石の上には、何も無かった。父がやって来ると、母は大急ぎで父の靴を靴箱のなかにかくしてしまうのだ。多分それは竹雄が産れるよりももっと前からの、母の習慣であったに違いない。父が来ているということを、母は誰にも知られたくないのだ。母はその事を、自分で恥じているのだが、竹雄は逆に、恥じている母の在り方を、はずかしいと思っていた。（お父さんは偉いお人なんだから、私みたいな者が人眼につくような事をしたら、お父さんは迷惑なさるんだよ……）と彼女は言っていた。

しかしそのことは、（お前も人眼についてはいけないのだ）という意味にも受取れるのだった。母はそれでもいいかも知れない。竹雄にしてみれば、喉をふさがれたような息苦しいものを感じないでは居られなかった。彼は父が好きでなかった。

黙って靴をぬぎ、廊下を奥へはいって、彼は四畳半の自分の部屋にはいる。ノートと参考書とのはいった鞄を机の上に投出し、金ボタンの付いた学生服をぬいだ。半月に一度ぐらいやって来る父に、彼は何かしら不潔なものを感じていた。父はこの家に朝まで泊ったことは一度もなかった。だから竹雄は父にむかって、（おやすみなさい）を言ったことも、（お早うございます）を言ったことともない。父と食卓を共にしたことさえ一度もなかった。彼は父から愛されたような記憶すらも持ってはいなかった。

民子が階段を降りてきた。良い着物をきている。ふだん着ではない。そのうえ羽織まで重ねて、うす化粧をしている。化粧をするとふっくらとして、きれいに見える女だった。小柄で小肥りの、年よりは若く見える女である。竹雄の部屋の入口までできて、

「お帰り。お父さんが見えていらっしゃるのよ」と言った。「二階へ行って、御あいさつしておいで……」

竹雄は返事をしない。母に対して何かしら不満なのだ。忘れた頃にやって来る父に、心をこめて奉仕している母を、この青年は何となく不潔なもののように感じていた。母への嫉妬かも知れない。

「お前に何だか、おはなしが有るそうよ」と民子は重ねて言う。

息子の機嫌をとるような言い方だった。息子の不機嫌を母は知っていた。父が来ているときはきっと不機嫌になる息子。……その気持も解らなくはない。しかし、だからと言って、いまさらどうする訳にも行かないのだ。

竹雄が勝平を好きでないことは解っているが、勝平は竹雄の実父である。実父であるということで民子は安心していた。戸籍では勝平の子とはなっていない。民子ひとりの子である。しかし血縁はまぎれもなく親子だった。それは誰よりもたしかに、民子の肉体が知っている。その事だけをたよりにして、民子は竹雄の気持をやわらげたいと思っていたが、竹雄の方でみれば逆に、勝平がたしかに実父であるというその事が、我慢のならない気持だった。

母は茶の間にはいって電灯をつけた。六畳の部屋の内部があかるく照らし出される。一糸のみだれも見えないほど整然とした部屋だった。茶だんす、置時計、ラジオ、火鉢、茶器、塗りの食卓、なにもかもがきちんとしていた。それはいつも母と息子と二人きりで食事をする部屋だった。しかし母はこの家を、息子のために整えるのではなく、勝平のために整えているのだった。彼女は日ごと夜ごと、辛抱づよく、執念ぶかく、勝平を待ちつづけている。待ちつづけながら、廊下の板をみがき、風呂場をみがき、玄関の格子を洗う。この母は父から、まるで牝鶏を飼うようにして飼われている。しかも母はそのことに安住していて、父に抗議することも知らず、父の言いなりになって、父を尊敬し、有難がって暮しているのだ。……

民子は塗りの盆のうえに酒の銚子と、なにか酒の肴をのせて、また廊下を二階の方へあるいて行った。竹雄は立ったまま煙草をくわえて、母のうしろ姿を眼をすえて見つめていた。二階へ行く母の姿は、いそいそとして、しなしなとして、青年の眼から見ると、母というよりは一匹の牝だった。あまりにも女だった……。そういう母のなまなましさを見ると、ますます彼は父を憎みたくなるのだった。あの父によって、あの母から自分がうまれたということが、耐えがたい屈辱に思われてくるのだった。

窓の外は暗くなっていた。竹雄は机のまえに寝ころんで、窓越しに見える淡い半月をながめていた。電話のベルが鳴りはじめた。彼は出て行かない。ベルはしきりに鳴りつづける。意地になって彼は寝ころんでいた。あわただしい母の足音が階段を駆けおりてきた。忍びやかな声で応対している。母は大きな声で電話をかけることも出来ないような女だった。

母が二階へあがってゆき、入れちがいに勝平の重い足音が降りてきた。すると竹雄は耳をすませて、電話をかける父の言葉をきこうとしていた。やはり彼はこの父のことを知りたがっていた。彼は父に関して、まことに少しの事しか知らされていなかったのだ。

葉巻をくわえて……

勝平は浴衣のうえに紬のあわせを重ね、総しぼりの帯を太い腹の上にぐるぐる巻きにしていた。葉巻をくわえたままで受話器をとる。相手はていねいな口調で、

「あ、会長ですか。岩淵です」と言った。「お休みのところを、相すみません」

岩淵は会長がいまどこで何をしているのか、全部知っていた。ほかの社員ならば電話をかけることを遠慮するところであるが、岩淵は秘書という仕事の性質上、遠慮しなくてもいい立場だった。勝平の秘書はあちこちの会社と自宅とで、およそ五十人ばかりも居る。岩淵はその中でも、十年以上も彼の秘書をしている古顔だった。

「二つばかり急のことで、御指示を願いたいんですが……」と相手は言った。

「ああ、何だね」

「一つは例の建築中のアパートの件です」

「アパートがどうしたね」

「建築反対運動の代表者が、明朝九時から十時のあいだにお宅の方へお訪ねしたいと言うんですが、どう致しましょうか」

渋谷からすこし郊外へ出たところの丘の中腹に、地下一階地上七階のアパートを建設しようとして、いまようやく地下工事を終り、鉄骨の組立てにとりかかったところである。工事は勝平が主宰する有馬建設会社、工事完了後は勝平の長男の竜太郎が社長になっている有馬住宅会社が運営に当る。貸室の数は三百十二室。貸店舗四十八。これで一カ年の純益一億八千万円が予定されていた。

「反対運動というのは、何だね」と勝平は冷静に問返した。「誰がやっているんだ」

「ええと、つまり、建物が完成するとまるきり日光がさえぎられるという事です。要するに北側から西側にかけての居住者ですね」

「全部で何人だ」

「反対声明の書類に名前を書いてあるのは、四十九人ですか。その位です」と岩淵は言う。

「それは何だ。住宅か、商店か」

「住宅兼商店が大部分です。中には按摩業とか、歯医者、下宿屋というようなものもあります」

「その反対運動というのは、いつから始まったんだ。今度がはじめてか」

「ええと……そうです。反対運動という形をとったもの

は今日のやつが最初です」
「これまでは何も無かったのか」と勝平は秘書を問い詰めて行く。
「手紙は来ていました」
「どんな手紙だ」
「要するにアパートが建つと自分は迷惑するから、やめてくれというような意味のものばかりでした」
「何通来ている？」
「五通ぐらいです」
「みんな個人名義か」
「そうです。個人名義で、ばらばらに来ました」
「その連中が結束して、仲間を集めたという訳だな」
「そうだろうと思います」
「要するにかねがほしいんだろう」
「そうかも知れません」
「かねをよこせと言うのか、工事をやめろと言うのか」
「工事をやめてほしいという要求です」
「工事中止を要求するのならば、半年前に言って来なくてはならん筈だね」と勝平は歯切れの良い言い方をした。
「アパートの建設は敷地を買収した時から発表してある。十カ月もまえだ。地下工事にとりかかったのは六カ月もまえだろう」
「左様です」
「その時に工事反対運動をしないで置いて、地下工事が終った今になって工事中止を要求して来るのは、かねがほしいからだ。そうだろう」
「そうかも知れません」
「よろしい。会ってやろう。明日の朝九時に私のうちへ来るように、返事をして置け」
「はい……」
「もう一つの用件は何だ」
反対運動などというものを、勝平は頭から問題にしていなかった。（どんな立派な事業にも、必ず反対するやつは居るものだ）と彼は思っていた。テレビジョンの会社が設立された時だって、テレビの普及に反対した人間も居たのだ。そんなけち臭い反対を押切って、人類の文化は滔々として進んで行く。（反対をこわがって居て、大きな事業なんかやれるものか）と彼は思っていた。そういう図太い自信が彼の仕事を支えているのだった。
「もう一つの用件は池内茂也という人なんですが……」
「ああ、三、四日まえに来た男だな」
「そうです。是非一度会っていただきたいということで、明朝お訪ねしたいというんですが……」
「用件は何だね」

「直接にお話したい、極秘の事だと言って居りますが、要するに新しく電車の路線を造ってくれないかと言うことです」
「どこだ」
「それは直接にお話したいと申して居ります。何ですかその路線は将来大変に有望だと言うんです。もしも有馬さんが引受けて下さらないのならば、香月さんの方へ話を持って行くつもりだと言っていました」
香月信蔵は事業の上で有馬勝平の競争相手であり、十年越しの仇敵でもあった。香月は二つの電車路線と二十八のバス路線を経営し、七つのホテルと、大小五つの百貨店とを持って居る男だった。池内茂也という人物はその事情を承知のうえで、嫌がらせを言っているのだった。
「その池内とかいう男は、俺が電車路線をつくれば、何かもうかる事があるのか」と勝平は言った。
「はっきり言いませんが、いろいろ有るらしいです」と岩淵は言う。「用地買収には積極的に協力するとか、認可申請には地元出身の代議士に運動してもらうとか言って居ました。土地をかなり持っているらしいですね」
「ああ、そうか、その男に竜太郎を紹介して、会わせてくれ。そしてよく話を聞いてみるように。……それから、その池内に十万円ほど包んで渡して置け。一応こっちで研究させてみようじゃないか。そのあいだはつなぎ止めて置く方がいいだろう」
長い電話だった。電話を切ると彼はまた重いからだで階段をきしませながら、二階へあがって行った。事業にかけては強欲で非人情な男だった。むしろ自分で非人情になろうとしていた。人情は邪魔だ。事業というものは、それ自身が社会のため民衆のために役立つものなのだ。迷惑を受ける者が三人や五人居たとしても、その位の犠牲は致し方ない。学校を作れば近所の住宅はやかましくて迷惑する。汽車を通せば沿線の住民はうるさくもあるし危険でもある。だからと言って学校も汽車もやめろという訳には行かない。そんな小さな犠牲者のことは考える必要はないのだ。(俺の事業は俺の社会奉仕だ……)と彼は思っていた。
二階では民子が、銚子の酒が冷えないように、鉄瓶の湯にひたして待っていた。
「何か急の御用ですか」と、不安な口調で言う。急川でいまから帰ると言い出すかもしれないのだ。
「いや、何でもない」と勝平は元の机にすわり、盃を手にした。民子に酒をつがせながら、「あれは……」と言った。「もう学校から帰っているんだろう」
「はい、帰りました。御挨拶に来るようにいっておいた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com